



「WA-日本のデザインと調和の精神」展

WA: l'harmonie au quotidien -
Design japonais d'aujourd'hui

フランス・パリ

会期●2008年10月22日(水)
~09年1月31日(土)

会場●パリ日本文化会館

※ハンガリーのブダペスト(4月8日~5月31日)、ドイツのハンブルク(6月19日~10月4日)のほか、さらに欧州各国を3~4カ国巡回

パリ日本文化会館での展示より。照明を落とした会場に、展示物が映えるよう、美しくライティングされた
撮影：C.O.Meylan (以下も同じ)

「WA-日本のデザインと調和の精神」展 国際巡回展スタート!

日本のすぐれたプロダクトデザインを紹介する国際巡回展が、2008年10月22日から09年1月31日までのパリ日本文化会館での展示を皮切りに始まった。ここでは代表的な作品とパリでの展示の様様を紹介する。





会場は、「12のカテゴリー」と「6のキーワード」にしたがってセクション別にわかりやすく展示。「家具」のセクション(手前)から「あかり」のセクション(奥)を見る。左は展示会のポスター

対立概念を調和、融合させる デザインの力

柳宗理(やなぎむねり)のバタフライイスツールから最新モデルの携帯電話まで。50年来のベストセラー・オートバイと全面漆塗りの小型スピーカーなど。大小160点のデザインプロダクトを集めた、本格的な現代日本のデザイン展、「WA」日本のデザインと調和の精神」展が欧州最大の日本文化発信地、パリ日本文化会館で2008年10月22日に開幕しました。

4人のキュレーター、柏木博(武蔵野美術大学)、深川雅文(川崎市市民ミュージアム)、川上典季子(デザイン・ジャーナリスト)、萩原修(デザイン・ディレクター)によって厳選された現代のデザインプロダクトは「食器」や「家具」などの12のカテゴリー、そして「かわいい」「ミニマル」など日本デザインの特徴を示す6つのキーワードでわかりやすく構成されました。

コンセプトはタイトルにもなっている「WA(和)」。作品の向こうにあるいくつもの対立概念「最先端デザインと伝統工芸、自然と人工、都市と地方、日本的と西洋的」を調和させ、融合させる力こそ、日本デザインの特徴、「和」なのです。「和」は調和の「和」であるとともに、「日本」をも意味しています。この展覧会で提示された数々のデザインを読み解くためのキーワードと言えましょう。



↑「オムニボット・ワンセブンミュー・
アインボット」2007年
D: 苑田文明
C: 株式会社タカラトミー
© 2007 TOMY

→「INFOBAR」2003年
D: 深澤直人
(NAOTO FUKASAWA DESIGN)
C: KDDI株式会社



↑「オーバス-1 ネロ」2008年
D: 岩崎一郎
(IWASAKI DESIGN STUDIO)
C: 有限会社エバーグリーンイ
ンターナショナル
©EVERGREEN INTERNATIONAL



→「ワンピーススリッパ」
2004年
D: 廣田尚子
(ヒロタ・デザインスタジオ)
C: naoca



↑「タグカップ」2004年
D: 塚本カナエ
(Kanae Design Labo)
C: アッシュコンセプト
© h concept



↑「kehai」2004年
D: 小泉誠 (コイズミスタジオ)
C: 株式会社タカタレムノス
Photo by Hiroyuki Shinohara

→「サイレントギター」2001年
D: ヤマハデザイン研究所
C: ヤマハ株式会社
© YAMAHA Corporation



↑「スーパーカブ50」1958年
C&D: 本田技研工業株式会社
© Honda Motor Co., Ltd.

D: デザイン
C: 会社

もうひとつの目玉は、展示空間。松下デザイン室の洗練された会場サインとミラノサローネ（ミラノ国際家具見本市）でも大評判の日本人デザイナーチーム、「トネリコ」の空間構成が融合し、天井から吊り下げられたドロップペーパーが幾重にも連なる、それ自体が作品のひとつと言ってもおかしくない、「幻想的な展示プラットフォーム」（来場者コメント）が生まれました。

開幕した10月22日には4人のキュレーターに、ポンピドゥーセンターデザイン部門の主任キュレーターであるマリロー・ロル・ジュツセ氏を迎え、「日本のデザイン」をテーマとしたシンポジウムを開催。日本デザインの真髄を探求する論議に、フランスの聴衆も熱心に耳を傾けました。

なにげない、シンプルな形のフラワーベース。デザイン性だけでなく機能性にも優れた洗濯機。思わず手を触れてしまいたくなるような、デリケートなラインの自転車。それぞれに日本のデザインセンスが光っています。

ブダペスト、ハンブルクほか、ヨーロッパ各地への巡回も予定されています。日本のデザインを再発見すると同時に、現代のデザインの潮流に触れてみませんか？

(文・牧瀬浩二)